

國學院大學學術情報リポジトリ

2020年度国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人」報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-16 キーワード (Ja): NDC8:302.1 キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001625

陰陽師からいざなぎ流へ —見えるものから〈見えざる世界〉を探る技法—

斎藤 英喜
(佛教大学)

はじめに

高知県旧物部村（現・香美市物部町）の民俗信仰「いざなぎ流」は、民間社会に定着した陰陽師の姿を伝えるものとして知られている。そこでは膨大な数の祭文が伝来し、複雑に構成された祈禱、祭祀、神楽が実修されてきた。「太夫」と呼ばれるいざなぎ流の宗教者たちは、家に祭られる神々、深い山や谷、川のなかに潜む精霊たちの「お叱り」をキャッチし、また人間の心のなかから生み出される「すそ」と呼ばれる負のエネルギーと向かい合い、それが人間社会に災いをもたらさないように対処する存在である。さらに神々を使役する「式王子」という呪法も伝えていた。

一方、いざなぎ流の源流とされる「陰陽師」は、平安時代中期の王朝社会において、天体から発せられる災いのメッセージを読み取り、また時間の流れを計測して「暦」を作り、あるいは鬼を追い祓う儀礼や呪詛祓え、病気治療などに携わっていた。

こうした陰陽師やいざなぎ流の太夫たちは、まさしく〈見えざるものたち〉と交流し、祭り鎮め、あるいはそれを使役する力を持つ者と考えられよう。

しかし〈見えざるものたち〉とは、あらかじめ存在するものではなかった。陰陽師やいざなぎ流太夫たちの呪能や技法によって、じつは、誰もが見えている世界の背後に〈見えざるもの〉が探り出され、顕現させられてくるのだ。〈見えざるもの〉は、最初から存在しているわけではないのだ。

本稿では、そうした視点から、天体の星の世界に人間たちの見えざる運命を探り出す占星術の技法や、見えている物によって作られた祭壇から、見えざる「呪詛（すそ）」の起源神話を呼び起こす呪法などを解明していきたい。

一、星を観るひと、安倍晴明

(1) 陰陽寮の組織とは

陰陽師といえば、安倍晴明（921～1005）が有名だ。式神を使役し、呪詛を祓うといった呪術のイメージが



京都一条通りの「晴明神社」の門。式神が開閉していたという説話が伝わっている。

強いが、しかし歴史記録に登場する晴明は、陰陽寮の天文部門に所属する「天文得業生」であった。「陰陽寮」とは古代律令国家の役所のひとつで、怪異の占事などを行う「陰陽部門」、暦の計測・作成をする「暦部門」、時間を計って告知する「漏刻部門」、そして天体を観測して天文異変の占いをする「天文部門」の四つのセクションに分かれていた。以下のような組織である。

〔事務官僚〕

頭一人（天文・暦数・風雲の気色を奏聞）、助一人、允一人、大属一人、少属一人。

〔専門技官〕

〔陰陽部門〕

陰陽師六人（占筮、相地） 陰陽博士一人（陰陽生の教授） 陰陽生十人

〔暦部門〕

暦博士一人（造暦、暦生の教授） 暦生十人

〔天文部門〕

天文博士一人（天文の気色を奏聞。天文生の教授） 天文生十人

〔漏刻部門〕

漏刻博士二人（守辰^{しゅしん}を率いて、漏刻の節を伺う）

守辰丁 二十人（漏刻の節を伺い、時を以て鐘鼓を撃つ）

使部 二十人、直丁三人。

ようするに「陰陽寮」とは、国家公務員の占術集団といえよう。晴明はこの天文部門に所属して、天体を観測し天文占いの研究をする学生（得業生とは、優秀な学生に与えられる称号）であったわけだ。ちなみに「天文得業生」だったときの晴明の年齢は四十歳。得業生から「博士」に昇格したのは五十二歳だったので、かなり「遅咲き」の人生といえよう。

(2) どのように星を観るのか

では彼らはどのように天体を観測して、天文の占いを行っていたのか。規定によれば、銅渾儀など天体観測の道具を使って、戌刻（午後七時～九時）と寅刻（午前三時～五時）の二回定期的に観測していた。その観測結果を天文博士に報告し、博士が天文占書などで占い判じる。そこで使用されたのが、『史記』天官書、『漢書』、『晋書』天文志、『三色簿讚』、『韓楊要集』などの占星術書であった。

それにしても、現代の感覚からすれば、天文の占いが国家公務員の仕事であったというのは、なんとも奇妙であろう。しかし晴明たちが星の動きを通じて占うのは、今のような個人の運命ではなく、天皇や国家全体に関わることだった。したがって、天文部門にたいして、「^{げんしやう}玄象の器物（銅渾儀など天体観測のための道具）・天文占書（『日月五星占図一卷』『五星廿八宿占一卷』『二十八宿図三卷』などの天文占書）の私有の禁止（「職制律」、天体を観測する機具（渾天儀）や占星術書を厳重に保管すること、天文の観測をする学生はそ

の結果を他に漏らしてはならないこと、許可なく占星術書を読んではならないことなどが法令で定められていた（『律令』雑令）。

また僧侶たちにむけても「凡そ僧尼、上づかた玄象を觀て、仮つて災祥を説き…並びに法律に依りて、官司に付けて、罪科せよ」（「僧尼令」一条）とあるように、天体の観測や天文占いをすることが禁じられていた。これは天文の技能などが、もともとは仏教僧侶たちが伝えたものであり、彼らはそのエキスパートでもあったからだ。しかし彼らが私的に天体を観測し、天文占星術を駆使することは禁止された。天体という見える世界から〈見えざる世界〉の探索・判定は、「陰陽寮」という国家の機関に一括、管理されていたのだ。

それにしても天体に輝く星々は、誰の眼に見えるものだ。だが、その誰もが見ている星と星との配置を観測したり、また時間の変化で星の位置が変わることを計測したり、そしてさらにその星々の配置の背後に、どんな隠された意味があるのかを探り出すことは、普通の人間たちにはできない。それを行う能力をもつのは陰陽寮に所属する天文部門の官人たちに独占されていたのだ。

清明たちの時代にあつて、天文占術が、なぜそれほどまでの秘密業務だったのか。それは古代国家が「天」の意思を受けて運営されるという思想をもっていたからだ。その思想は古代中国・前漢の儒学者・董仲舒（とうちゅうじよ前179～前104）が作った「天人相関説」にもとづく。すなわち「天体现象は天が支配者に下す前兆とみなすと同時に、支配者の行為が逆にまた天体现象に影響すると考えられた。天と人との間に深い相互関係が成立った」（藪内清）とされるわけだ。

天体の星の動きに異変があるとき、それは「天帝」が地上の支配者＝「天子」に下したメッセージであり、逆に地上の支配者の政治が悪い方向にむかうと、それは星の運動に影響する。まさに天と人とは相応の関係にあつた。したがって、陰陽寮の天文部門の仕事は、星の配置や動きを専門の器具を使って観測しつつ、天帝から天子にむけて発せられるメッセージを読み取ることにあつた。そのメッセージこそ、誰もが見ている天空の星の背後に隠されている〈見えざるもの〉の意思といえよう。それを〈見る〉のが安倍清明たち、陰陽師に課せられた任務であつたのだ。それほど重大な任務が陰陽寮にあつたわけだ。

（3）清明による天文密奏

ではどのような星の配置、動きがあつたときに、彼らはその背後に〈見えざるもの〉からの意思を読み取るのだろうか。その多くは、天体上の星と星とが普通とは違って、接近しているように見えるときだ。これを星の合犯（ごうはん）という。西洋占星術では「コンジャンクション」という。もちろん、その星と星との接近は見かけ上のことであつて、実際の宇宙空間で星と星とが接近する＝衝突しているわけではない。古代の天文学では宇宙空間では三次元ではなく二次元と認



清明神社の「安倍清明公」の像。天空の星を見つめ、袖のなかで「印」を結ぶ姿である。

識されていたわけだ。

星と星との接近が見えたとき、古代の陰陽道の知識からは、天皇や国家の運命にかかわる、なんらかのメッセージが発せられたものと判断する。そしてそれを判断=占ったら、その結果は一般には公開せずに、天皇だけにひそかに奏上される。これを「天文密奏」という。歴史上の安倍晴明も、三回、その任務を果たしたことが記録に見える。

*天禄三年（九七二）一二月六日 〈五十二歳〉

天文博士安倍晴明に、右兵衛陣外において天文奏を奏せしむ。触穢そくえに依るなり。奏文そうもんに云はく、去月廿日さいせい、歳星犯すと進覧すと云々、今日四日、太白たいはくと月、同じく度ると云々。（『親信卿記』）

*天延元年（九七三）正月九日 〈五十三歳〉

天文博士晴明、変異を奏す。其の書に云はく、二日、白虹はっこう、日を匝めぐる。五日、白氣丑寅・坤に亘る。七日、鎮星とうせい、東井第五星を犯す。（『親信卿記』）

*天延二年（九七四）一二月三日 〈五十四歳〉

三日、晴明に密奏を奏せしめて曰く、鎮星、第四星を犯すと云々。（『親信卿記』）

歳星（木星）、太白（金星）、鎮星（土星）が月や二十八宿の「東井」第五星などが、急激に接近して見えたとき=合犯と判定されたとき、天文密奏が行われる。天皇だけにひそかに伝達されるのだ。それは天文博士のみに独占された任務であった。ちなみに天文博士が天文の変異を天皇に奏上すると、中務省なかつかさを経由して「国史」（公的な歴史記録書）に載せられるが、「占言」の部分は記載しない。見えている天体の様子から、〈見えざる世界〉=国家の運命は、天皇だけが知ることのできる秘密であったのだ。

こうした星と星とが見かけ上、接近して見えることは、じつは、しばしば起きている。もちろんそれは「見かけ上」であって、本当に星と星が接近することは起きていない。それは現代天文学の知識からは常識である。だが星同士が見かけ上接近して見えることはよくあることで、現代の天文学の知識では別段、奇異なことではない。

たとえば2004年11月5日午前5時に、東の方角で金星と木星とが見かけ上、最接近する現象が起きている。夜明け近くに一瞬ふたつの星が重なってパッと輝いて見えたのだが、それを安倍晴明が占ったならば、「軍隊の敗北、水害」という、きわめて禍々しい事態の前兆となるのだ。ちなみにその年は全国的に水害が起きて、また自衛隊がイラクに派遣された時である。晴明ならば、そうした占いの結果を天皇に密奏するわけだ。

(4) 陰陽道の成立とその後

あらためて陰陽道とはなにか。一般に認知されている「常識」では、古代中国で成立したもので、それが日本に輸入されたという。しかし、これは間違いであったようだ。

もちろん天文占術や陰陽・五行説、天人相関説という教えは、古代中国で作られたものだが、それらを「陰陽道」の名称で呼ぶことは中国の文献にはなかった。近年の研究によれば、陰陽道のネーミングは十世紀の日本の文献に初めて出てくるもので、まさしく安倍

清明の生きた時代であったことが判明している。「陰陽道」とは、中国の陰陽・五行説、天文占術などの知識と密教や在来の神祇信仰などをミックスさせて、日本が独自に編み出した信仰・呪術・祭祀の体系なのである。すなわち「陰陽師等を中核とし、彼らが専門的に掌った学術・技能および職務が一体化したものとして九世紀後半から十世紀に成立した概念」（山下克明）であったのだ。「道」とは、その専門家という意味であった。安倍清明とは「陰陽道」のキーパーソンといえよう。

また『今昔物語集』をはじめとした説話集などでは、安倍清明は当代一流の陰陽師と呼ばれる。誰もが清明を陰陽師と認識していよう。だが、その場合の「陰陽師」とは陰陽寮という役所のなかの官職名ではなく、「官制に関わらない職業としての陰陽師」と認識するのが正しいようだ。どういうことかということ、清明が「陰陽師」として、たとえば一条天皇の外出に際して反閤という呪術を行ったり、道長の外出するときの日時を選定したり、また泰山府君祭、玄宮北極祭という延命長寿を祈る祭祀を執行しているときは、彼はすでに陰陽寮を退官し、別の役所の官人となっていた。にもかかわらず清明は「陰陽師」として占いや呪術、祭祀を天皇や貴族たちに頼まれて行っていたのである。

ようするに陰陽寮をやめたあとのフリーの祈禱師、占術師として活動するのが「陰陽師・安倍清明」の実像であったといえよう。陰陽寮を離れたあとも、彼が「陰陽師」として人びとの依頼、期待にこたえていたのは、彼が陰陽寮という役所とは無関係に、自らの術や技でのみ活動しえる、まさしく「術法の者」（『続古事談』）として生きていたからだろう。同時代の記録にも清明は「陰陽の達者なり」（『政事要略』）、「道の傑出者なり」（『権記』）と賞賛されていたことが見える。それこそまさに〈見えざるもの〉を顕現させる力といえよう。

貴族中心の政治支配が終わり、武士の世の中になった鎌倉時代以降、陰陽師たちはどうなったのか。安倍家の流れをくむ多数の陰陽師が鎌倉幕府に仕えている。『吾妻鏡』には、なんと百名を越える陰陽師の活動が見られるという。また室町時代になると安倍氏は「土御門家」を名乗り、幕府のなかで重んじられていった。三代将軍の足利義満に気に入られた安倍あり世は、清明を越えて従二位までの高位に上っているほどだ。

その後、豊臣秀吉の時代になると、土御門久脩という陰陽師が秀頼呪詛に関わったという嫌疑をかけられ配流される事件も起きている。文禄三年（1595）には、京都在住の陰陽師、131人が強制的に尾張に移住させられ、荒蕪地の開墾に従事させられた。「陰陽師狩り」と呼ばれる事件だ。秀吉はそうとう陰陽師が嫌いだったらしい。陰陽師の受難の時代だ。しかし大坂夏の陣で豊臣家が滅んだ後の元和七年（1621）には、配流された久脩は政界に復帰して、従三位に叙せられている。

さらに綱吉将軍の頃、天和三年（1683）、土御門家は幕府の宗教統制政策に沿って、地方社会で活動していた民間系の陰陽師たちを支配していく法令を朝廷、幕府に認めさせていった。それ以降、地方の民間系の陰陽師たちは土御門家の「許状」を得ないと陰陽師を名乗ることができないというシステムが確立するのである。それは村落社会からは差別的な扱いを受けていた民間系陰陽師たちにとっては、土御門家の「門人」となることで身分が保証される一方、その見返りとしての上納金を納めることになったのだ。

こうした民間系の陰陽師の末裔として有名なのが、高知県旧物部村で活動を続けている「いざなぎ流」の大夫たちである（ただし彼らは土御門家の門人となったグループとはまた別系統であった）。

二、いざなぎ流太夫と〈見えざる世界〉

(1) いざなぎ流とは

四国山脈が連なる山深い集落、高知県物部村^{ものべそん}（現在は香美市物部町）。列島各地に点在する典型的な過疎の村だが、この物部村こそ、安倍晴明に発する陰陽道を今に伝える「いざなぎ流」の太夫^{たゆう}たちが活動する村である。

いざなぎ流といえば、文字通り〈見えざるもの〉の世界と直接コンタクトをとる存在として

知られていよう。山の神や水神などの自然神たち、さらにその眷属とされる山に生息する精霊、妖怪変化たち。さらに人間のマイナスの感情から発生する「すそ」……。

いざなぎ流の名前が有名になったのは、小松和彦氏の『憑霊信仰論』^{ひょうれい}の功績が大きい。とりわけそこに紹介された、釈尊^{しゃくそん}と提婆王^{だいば}とのあいだで財産相続をめぐる「呪い」の合戦を描く「すそ（呪詛）の祭文」は、衝撃的だ。それは物語に終らない。「すその祭文」に登場する、呪いを請け負う「唐土じよもん」^{とうど}なる人物は、いざなぎ流の太夫の先祖であったというのだ。そこでいざなぎ流は、実際に呪いをやっているというイメージが世間に広まってしまった。

しかし「すその祭文」は、呪いを仕掛けるためのものでも、また仕掛けられた呪いを打ち返すものでもない。それは太夫たちが行なう宅神祭（家の神の祭り）や氏神祭祀、山鎮めなどの祭祀執行に先立って行なう「すその取り分け」という儀礼で読まれるものだ。「すそ」とは、過去に行なわれた呪いの行為を含みながらも、さらに広い意味での不浄や穢れのことをあらわす。人間たちが集団で暮らすなかで無意識に抱いてしまう憎しみや恨み、嫉みなどは、家や村のなかに溜まることで、神々にたいする穢れとなってしまう。そうすると神からお叱りを受ける。そうならないために、神々を祭るときには、まず「すそ」を除去して、清浄な空間にする必要がある。それを行なうのが「すその取り分け」であった。「すその祭文」は、その儀礼で読み唱えられたのである。



山間の村、旧物部村の景観。



いざなぎ流の宅神祭における神楽の様子。

(2) 取り分けの祭壇と祭文を読む声

次に「すそ」を除去していく儀礼の現場に立ち会ってみよう。まずは「法の枕」という一斗二升の米が入った容器と「ミテグラ」と呼ばれる祭具が用意される。その祭壇をまえにして太夫たちは「取り分け」の儀礼を執行するのである。

ところで筆者が「いざなぎ流」の調査を始めたころ（1987年）、「すそ」を取り除く儀礼を見せてもらったとき、まず太夫に写真撮影の許可を取った。そのとき太夫は、なんの注文もなく撮影を許可してくれた。「写真で撮って、それを見てもなにもわからない」というのが、その理由であった。見えているものには、別に問題はなにもない。見えているものからは何もわからない……。そして太夫は言ったのだ。「師匠について学ばねばわからない」と。

こうした調査の現場からわかってくること。「取り分け」の儀礼は、祭壇をまえにして太夫が、唱え言を唱えながら「法の枕」に山の神の幣、水神の幣、四足の幣、荒神の幣、天神の幣、すその幣…という神々をかたどる御幣を立てていく。また「法の枕」には、「高田の王子」の御幣が立っている。さらに「ミテグラ」のほうには「だんばの人形」の幣が立っている。われわれが目で見えているものは、こうした祭壇であり、太夫の所作である。ここには何も〈見えざるもの〉はない。

けれどもここで「すそ」を取り除くという〈見えざる〉ことが顕現してくるのだ。それを立ち上げさせるものこそ、太夫が読み唱える「祭文」と、その太夫の声の力であった。そこで読まれるのが「すその祭文」である。



「法の枕」と「ミテグラ」。



取り分けの祈禱をする太夫。

釈迦の時代、子供がいなかった釈迦は、財産を養子とした提婆の王に譲ることにした。だが、その後、実子の釈尊が生まれので、財産にそちらに譲ることになった。それを恨んだ提婆の王は釈尊と争そうが、負けてしまう。それにたいして、提婆の王の妃が自ら釈尊への呪い調伏を仕掛けるが、咎のない釈尊には効き目がなかった。そこで通りかかった唐土じよもの巫に呪詛（すそ）の仕掛けを依頼する。最初は断っていた唐土じよもの巫も、多数の財宝・供物を用意されて、釈尊への「因縁調伏」を仕掛けた。その呪いが掛かって病になった釈尊は、同じく唐土じよもの巫に依頼して「調伏返し」をしてもらう。すると提婆の王の妃に呪いが返って病になる。妃はふたたび唐土じよものに「調伏の一掃返し」を頼むが、これではきりがないので、唐土じよものは「呪詛の祝い直し」をして、日本・唐土・天竺の潮境に「南海とろくが島の呪

詛の名所」を設け、そこに呪詛神を送り鎮めた。

この祭文が読み唱えられたとき、「ミテグラ」に立てられた「だいはの人形」の幣が、釈尊と対立し、呪詛の原因となる「提婆の王」として顕現してくる。祭文によって「すそ」の起源神話と呼び起こす。幣を媒介として、この場には見えていない、提婆の王をめぐる呪いの物語が姿をあらわす。そしてその祭壇に「呪詛」=すそが呼び集められていくのだ。そればかりではない。祭文を読んだとき、読んでいる太夫自身も、「すそ」の起源とかかわる「唐土じよもん」へと変身するのである。取り分けの祭壇の空間は、祭文を読み唱えられることで、そこに語られる「すそ」の起源神話の世界へと変貌するのだ。太夫の読み上げる声を媒介に〈見えない世界〉が立ちあらわれるといえよう。

そして「法の枕」に立てられた神々の御幣についても、山の神、水神、荒神、天神などの祭文が読まれる。そこでも祭文を読む声によって、神々が顕現し、儀礼の遂行を守護してくれることになるわけだ。その最強の存在こそが「高田の王子」の幣。彼こそ、いざなぎ流のなかで口伝されてきた「式王子」（陰陽師の式神の一種）のひとりであった。高田の王子が、最終的に「すそ林」に埋められ、封印した「すそ」を鎮め、動き出ることがないように押さえつけ、見張る役割を担うのだ。それもまた太夫による「高田の行い」という唱え言を読むことで、高田の王子が発動してくるのである。



「すそ林」に封印する太夫。

おわりに

〈見えざるものたち〉と日本人——。このテーマを考えるうえで、いざなぎ流の太夫が教えてくれた言葉が浮かび上がってくる。太夫にとって、「なにかが見えているうちは、まだ一人前ではない」と。そう、いざなぎ流では、霊的な世界が見えている、というだけでは、太夫としての力量は不足しているのである。そういえば、筆者が調査しているときに、あらたに太夫に弟子入りした女性がいた。その女性は霊的なものが見えすぎるので、それを統御するために太夫に弟子入りしたというのだ。ここで彼女の宗教的なステージはアップしたことは間違いない。

ふだん、多くの人びとが見えている世界から、いかに〈見えざるもの〉を探索し、その正体をつかみ、それを顕現させてくるのか。その知識と術こそがいざなぎ流の核心にあるのだ。そしてそうした能力・知識の源流のひとつが、平安時代の陰陽師、安倍晴明であったといえよう。

参考文献

- ・ 山下克明『平安時代の宗教文化と陰陽道』（岩田書院、1996）
- ・ 細井浩志『古代の天文異変と史書』（吉川弘文館、2007）
- ・ 藪内清『増補改訂 中国の天文暦法』（平凡社、1990）
- ・ 赤澤春彦『鎌倉期官人陰陽師の研究』（吉川弘文館、2011）
- ・ 林淳『近世陰陽道の研究』（吉川弘文館、2005）
- ・ 梅田千尋『近世陰陽道組織の研究』（吉川弘文館、2009）
- ・ 斎藤英喜『増補 いざなぎ流 祭文と儀礼』（法藏館（法藏館文庫）、2019）
- ・ 小松和彦『憑霊信仰論 妖怪研究への試み』（講談社（講談社学術文庫）、1994）